

ダウン症のある子どもを育てる母親の心理的变化

—PAC 分析を用いた心理的变化の分析—

○上地玲子¹⁾・松浦美晴²⁾・岩永 誠¹⁾

(¹ 広島大学大学院総合科学研究科・² 山陽学園大学)

目的

障害のある子どもの親の心理的变化のプロセスについては、以下のような研究が行われてきた。鱈(1963)、田中・丹羽(1990)、要田(1989)らがわが子の障害について親の受容過程を徐々に適応する方向に進んでいくという段階に分けて説明している。一方、中田(1995)はわが子の障害に対して肯定と否定の両方の感情が常に存在していることを指摘している。

田島(2009)は、障害受容は外在的な障害観でとらえることの問題点を指摘している。しかし、出産前に予期していた育児と出産後とのギャップが与える影響の観点から研究しているものはない。このようなギャップは、Kramer(1974)が「リアリティ・ショック」という概念で説明している。Kramer(1974)は、新卒の専門職者が就職後予期せぬ苦痛や不快さを伴う不適応をリアリティ・ショックである定義しており、その後、新人看護師を対象とした研究が多数報告されている(e.g.岡本・岩永 2015)。最近では、新人保育士に対してもリアリティ・ショックの概念を当てはめて研究されている(Matsuura・Kamiji・Minagawa 2016)。

そこで、本研究ではダウン症のある子どもの母親が出産前後の心理的变化としてリアリティ・ショックを経験しているのかどうかについて、PAC分析(Personal Attitude Construction Analysis; 内藤, 2002)を用いて検討した。これは、自由連想法とクラスター分析によって、樹状図とその構造への解釈を行い、個人の態度の構造を明らかにする質的分析法である。データを収集する際にはPACHelperを用い、HALBAU7によってクラスター分析を行い、作成した樹状図を調査協力者と共に見ながら聞き取りを行った。

方法

調査協力者：5歳児から中学校1年生までのダウン症児の母親10名(40歳代)。

調査時期：2018年5月～9月

手続き：あらかじめ用意した刺激文を用いてインタビューを行った。また、同意を得て会話を録音した。所要時間は約2時間であった。

質問刺激文：「あなたの子どもがダウン症を持っていると分かる前(妊娠中)に、あなたが抱いていた子育てイメージと、ダウン症を持っていると分かったときの、あなたの子育てイメージの違いとして、そのときどのように思ったりどのようなことをしましたか？どのようなものが頭に浮かんできますか。その内容を思い浮かんだ順に教えてください。」

倫理的配慮：研究協力依頼書を作成し、書面に基づいて説明を行い、同意の得られた者を対象とした。また、広島大学の倫理審査委員会の承認を得て行った。

結果

共通した回答としては、出産前には予想していなかった出来事であり、「ダウン症について知らないことに対する不安」「将来の不安」「社会の偏見」などのマイナスイメージを抱いたことであった。個別性のある回答としては、「夫やきょうだいに申し訳ない」「次の子を産むか迷った」などの回答が得られた。

表 1. 刺激文の回答におけるマイナスイメージの割合

ID	ダウン症児情報	回答項目のマイナスイメージ割合
①	中学生(男児)	100%
②	小学生(女児)	82%
③	小学生(女児)	100%
④	就学前(男児)	79%
⑤	小学生(女児)	100%
⑥	小学生(男児)	92%
⑦	小学生(女児)	60%
⑧	小学生(男児)	71%
⑨	小学生(男児)	83%
⑩	小学生(男児)	56%

考察

ほとんどの母親が出産前後における育児イメージのギャップを感じており、出産直後にマイナスイメージを多く抱いていた。このことから、ダウン症児の母親において「リアリティ・ショック」が生じている可能性があることが明らかとなった。また、出産後の罪悪感を語る母親もいることから、職業として生じるリアリティ・ショックとは違う要素も含まれていることが考えられる。

今後は、ダウン症児の母親のリアリティ・ショック現象を明らかにしていく計画である。